第21回 福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE 2010

報　告　書

Illustration by Eiji Mitooka+Don Design Associates

主催／福岡市
財団法人よかトピア記念国際財団
後援／外務省
文化庁

第21回　福岡アジア文化賞 報告書

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620　福岡市中央区天神 1-8-1　福岡市国際部内
Tel 092-711-4930　Fax 092-735-4130
e-mail acprize@gol.com
http://www.asianmonth.com/prize

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

★福岡

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）

第21回学術研究賞受賞者
毛里 和子

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 徳 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）

第21回大賞受賞者
黄 秉 冀

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

第21回芸術・文化賞受賞者
オン・ケンセン

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）

アジア以外の国・地域

イギリス
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

アメリカ
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）

第21回学術研究賞受賞者
ジェームズ・C・スコット

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 01
福岡アジア文化賞とは …… 03
第21回受賞者
　黄秉冀 …… 05
　ジェームズ・C・スコット …… 07
　毛里和子 …… 09
　オン・ケンセン …… 11
各受賞者への贈賞理由 …… 13
授賞式 …… 17
広報活動ほか …… 19
歴代受賞者名鑑 …… 21

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、21年間で85人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大　賞 賞金　¥5,000,000	アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。
学術研究賞 賞金　¥3,000,000	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる
芸術・文化賞 賞金　¥3,000,000	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、財団法人よかトピア記念国際財団

5. 運営・選考組織

(1) 福岡アジア文化賞委員会

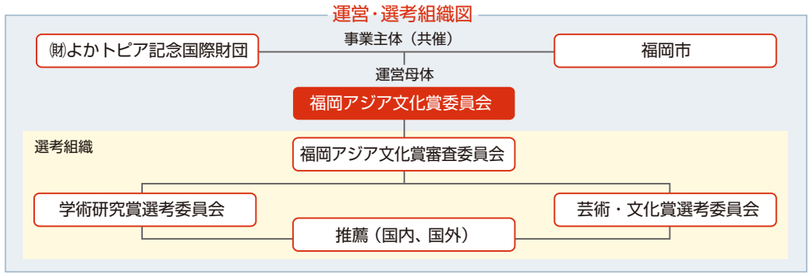
賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。

(2) 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会

各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選考し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で総合的に審査し、受賞者を決定します。

(3) 推薦依頼

広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。



第21回福岡アジア文化賞のあゆみ

2009.07	54か国・地域約7,000人に第21回受賞候補者の推薦を依頼
2010.01～02	学術研究賞（1月30日）、芸術・文化賞（2月7日）各選考委員会にて、推薦された29か国・地域の受賞候補者214名・団体について選考
2010.03	審査委員会（20日）にて審査
2010.05	審査・選考合同委員会（8日）
2010.06	文化賞委員会にて4人の受賞者を承認し福岡記者会見で発表（7日）、米国記者会見（29日）
2010.07	東京記者会見（13日）、ソウル記者会見（22日）、シンガポール記者会見（30日）
2010.09	授賞式（16日）、市民フォーラム（17日、18日、19日）、学校訪問（17日）、アジア文化サロン（17日、18日）

第21回福岡アジア文化賞　審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 **有川節夫** 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 **稲葉継雄** 九州大学大学院人間環境学研究院教授	委員長 **小西正捷** 立教大学名誉教授
副委員長 **髙田洋征** 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授	副委員長 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授
委員 **稲葉継雄** 九州大学大学院人間環境学研究院教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 **天児　慧** 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 **石坂健治** 東京国際映画祭事務局　アジアの風 プログラミングディレクター
委員 **小西正捷** 立教大学名誉教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 **石澤良昭** 上智大学学長	委員 **後小路雅弘** 九州大学大学院人文科学研究院教授
委員 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 **末廣　昭** 東京大学社会科学研究所教授	委員 **内野　儀** 東京大学大学院総合文化研究科教授
委員 **土屋直知** 株式会社正興電機製作所最高顧問 福岡商工会議所副会頭	委員 **竹中千春** 立教大学法学部教授	委員 **宇戸清治** 東京外国語大学大学院 総合国際学研究院言語文化部門教授
委員 **西村篤子** 国際交流基金統括役	委員 **中村尚司** 龍谷大学研究フェロー	委員 **川村　湊** 法政大学国際文化学部教授
委員 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 **新田栄治** 鹿児島大学法文学部教授	委員 **藤井知昭** 国際文化研究所所長

2010年9月現在

第21回
大賞受賞者

黄秉冀(ファン・ビョンギ)
HWANG Byung-ki

韓国／音楽
音楽家（韓国伝統音楽演奏家・作曲家・研究家）

韓国の伝統楽器である伽倻琴（カヤグム）の演奏家であり作曲家。伽倻琴の伝統を受け継ぎ深い理解に裏打ちされた演奏を続け、また伝統の継承と現代的展開を意図し、韓国を軸にアジアさらには世界へと視野を広げた作品を創り出し続けている。伝統の継承と新たな音楽創造を融合した功績はきわめて大きい。

主な経歴

1936	韓国ソウルに生まれる	2001-	梨花女子大学校名誉教授
1951-59	国立国楽院でカヤグムを習う	2003	方一榮（パンイルヨン）国楽賞
1957	KBS全国国楽コンクール最優秀賞		銀冠文化勲章
1959	ソウル大学校法科大学卒業	2006	大韓民国芸術院賞
1974	韓国映画音楽賞	2006-	国立国楽管弦楽団芸術監督
1974-2001	梨花女子大学校韓国音楽科教授	2008	一麦（イルメク）文化大賞
1986	ハーバード大学客員教授		建国60年記念事業委員会委員
1999-	ユニセフ文化芸術家クラブ会長		

主な作品

『黄秉冀 伽倻琴作品集第1～5集』1978～2007

主な著作

『梧桐千年, 弾琴60年』ランダムハウスコリア,2009.

多様な伝統文化が、真の世界的文化を育てる

私は1951年にカヤグムを習い始め、62年からは伝統音楽の継承にとどまらず、新しい作品を作曲し始めました。74年の「沈香舞」(チムヒャンム)という作品からはアジアに視野を広げた創作を始め、国際的にも受け入れられています。カヤグムを始めた当時は、韓国人ですら自国の伝統音楽に関心を持たず西洋音楽を愛好した時代でしたが、次第に国内でその価値を再発見しようとする機運が高まり、国際的にも民族固有の伝統文化の重要性が注目され始めました。真の世界的な文化とは、画一化よりも、多様な伝統文化が花咲く時に成し遂げられることが、世界的に認識されています。

「福岡アジア文化賞」は、アジア文化はもちろん、世界文化の向上に大きく寄与しています。この国際的な賞を受賞できて、とても光栄に思います。

（授賞式スピーチより）

学校訪問

実施日／9月17日　会　場／福岡市立日佐中学校

全生徒と保護者約450人と黄氏との交流会は、まず女子生徒5人が琴の演奏を披露。和楽器が好きで、琴を習った経験もある黄氏は、「桜」など日本の曲に聴き入っていました。

伝統楽器の解説をする黄氏

お返しは韓国から招いた演奏家による伝統楽器の演奏。「伝統をそのまま守るだけだったら骨董と同じ」、黄氏が披露したのは、すべて自作の曲。演奏に加えて、曲のモチーフや楽器についての解説もありました。最後は、チャングの躍動感あふれる独奏。「ほかの人を助けていると、いつかは自分が晴れ舞台に立てますよ」という生徒たちへのメッセージを込めたそうです。会場の体育館では、生徒の手作りによるアーチで出迎えたり、くす玉が割られるなど終始歓迎ムードに包まれ、黄氏らが退場する時には、演奏家と生徒とが笑顔で握手をかわすなど、心のこもった交流が行われました。

生徒５人が琴の演奏を披露しました

全生徒が美しい音色に聴き入りました

市民フォーラム

開催日／9月19日
会　場／イムズホール　参加者／400人

「韓国音楽の伝統と創造」

カヤグムの奏者歴 60 年になる黄秉冀氏の半生を振り返りつつ、これからの「伝統音楽」について熱く語ってもらいました。また韓国の演奏家５氏を招いて黄氏の代表作を演奏。繊細で清らかな音色が会場を包み込みました。

第１部 ―― 対談

国際文化研究所所長の藤井知昭氏と、黄秉冀氏が対談。カヤグムの特徴や、黄氏と韓国伝統音楽との出合い、音楽家を志したきっかけなどエピソードを交えながら、黄氏の音楽世界について語り合いました。

黄氏は「作曲を始めたのは26歳の時。従来の伝統音楽に新しい自分の創造を加えて、昔と未来をつないでこそ真の伝統の継承だと思った」と持論を展開。代表作「沈香舞」については、「当時の伝統音楽といえば李朝時代から受け継いできたもの。その伝統を打ち破るために、さらに時代を新羅時代にさかのぼった。当然楽譜などは残ってないが、新羅時代の遺跡や彫刻、遺品などが語りかけてくるものを感じ取り、舞曲を作った」と語りました。

藤井氏が「韓国の音楽で日本と大きく異なるのはチャンドンというリズム。韓国では長短を交えた３拍子」と指摘すると、黄氏は「長短を繰り返す韓国の音楽は、陰陽の概念に通じるものがあり、生命を生み出すことそのものと考えられている」と解説しました。

黄氏と対談する藤井知昭氏

第２部 ―― 韓国の伝統音楽を堪能

韓国の演奏家５氏と黄氏が氏の代表作を披露しました。黄氏自ら「沈香舞」を演奏したほか、チャングとコムンゴによる器楽「楽道吟」、歌曲「鞦韆詞」など計５曲を披露し、会場の盛大な拍手を浴びました。

アジア文化サロン

実施日／9月18日　会　場／ホテル日航福岡

黄夫妻、韓国の演奏家と、筑前琵琶福岡旭会の中村旭園会長をはじめとする日本の演奏家による音楽交流が行われました。お互いの活動や楽器の紹介から始まり、同会長の「いろいろと説明するより、まずは音を聴いていただきましょう」との言葉で、筑前琵琶の迫力ある演奏に移りました。

熱のこもった筑前琵琶演奏を受けて、黄氏ら韓国の演奏家たちもそれぞれの楽器の魅力を引き出した演奏で応えました。

予定時間をオーバーした演奏の後、黄氏が「言葉で話し合うよりも、私たちは楽器の奏でる音を通して分かり合える」と話すと、一同大きくうなずいていました。

解散後も、興味深そうに互いの楽器で音を出し合ったり、アドレスの交換をしたりと、真剣な中にも和気あいあいとした雰囲気の交流となりました。

VOICE

「韓国の音楽に興味があります。クラシックギターのプレーヤーなので、音楽性についての講演は特に勉強になりました。伝統音楽についてもっと知りたいです」加美田晃子さん(福岡市)、畑山美季さん（同）

第21回
学術研究賞受賞者

ジェームズ･C･スコット
James C. SCOTT

米国／政治学・人類学
政治学者・人類学者（エール大学政治学・人類学教授）

ジェームズ･C･スコット氏は、東南アジアの農民と社会の深い洞察に基づく研究を発展させ、近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々のダイナミックな関係を明らかにした。政治学、文化人類学、農村社会学、歴史学等にまたがる学際的な研究領域を開拓した貢献は絶大である。

主な経歴

1936	米国ニュージャージー州マウントホリーに生まれる
1954-58	ウィリアムカレッジ学士課程（政治経済）
1963-67	エール大学博士課程（政治学）
1967-76	ウィスコンシン大学政治学教授
1976-	エール大学政治学教授
1990-91	ベルリン高等研究院研究員
1991-	エール大学農村社会研究所所長
1995	米国芸術アカデミー研究員
1997-98	米国アジア研究協会会長
2002春期	ノルウェー、オスロ大学フルブライト研究員
2008	スウェーデン、ウプサラ大学名誉博士
2008春期	デンマーク、ロスキルデ大学客員教授

主な著作

『モーラル･エコノミー ―東南アジアの農民叛乱と生存維持』日本語訳 高橋彰訳 東京 勁草書房 ,1999
『統治から逃れるための技術:東南アジア山地のアナーキズム史観（仮題）』邦訳版みすず書房より出版予定（原題 The Art of Not Being Governed ニューヘイブン エール大学出版局 ,2009）

民衆の生存と名誉を守る闘い、その苦難に終わりを

アジアの芸術や学問への貢献に対し、福岡市ほど具体的な形で評価を示す都市を、私はほかに知りません。私は、そんな市民や行政の皆さまに敬服するとともに、歴代の著名な受賞者と同じ栄誉に浴することができ、誇りに思います。

私はこれまで、エリート層以外の人々の価値観、行動様式、市民生活を理解し、民衆の生存と名誉を守るための闘いを特徴づける、しばしば静かで控えめな抵抗の形態を特定しようと努めてきました。マレーシアやインドネシア、近年はビルマ（ミャンマー）の政治史を研究しています。この半世紀、ビルマの人々は圧制的な軍事政権下で暮らしており、軍事政権は２世代以上にわたって人々の生活機会を打ち砕いてきました。一般のビルマ人は、静かにそして頑強に、自分たちの名誉を奪う軍事政権に抵抗しています。ビルマの人々の苦難が終わりに近づくことを願っています。

（授賞式スピーチより）

学校訪問

実施日／9月17日　会　場／福岡県立城南高校

体育館に集まった1、2年生を前に「Speaking Truth to Power」と題し、スコット氏が講演しました。自身の経験を振り返り、「快適な場所から困難な場所に行き、大変な思いをすることが人生には必要。一番困難な時期が、一番成長し、最も試される時期である」と強調。「同じことの繰り返しの毎日ではなく、そこから離れ、快適ではない場所へ行き、新しいことを経験してほしい」と熱く語りました。

質疑応答では、多くの生徒が英語で質問しました。「留学したい」という生徒にスコット氏は「本当はここにいる生徒全員が海外に行くべきだ」とユーモアを交えながら答え、「自国の文化を見つめるいい機会になる。ぜひ外国で経験を積んでほしい」とエールを送りました。

「さまざまな経験を積むことで、人間として大きく成長できる」と力説するスコット氏（左）

約800人の生徒がスコット氏の話に聞き入りました

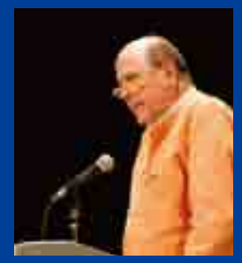
質疑応答では生徒から相次いで手が挙がり、会場内は熱気を帯びました

市民フォーラム

開催日／9月17日
会　場／イムズホール　参加者／220人

「統治する国家・支配されざる民」

近代国家による支配と被支配の関係を多角的に研究してきたジェームズ･C･スコット氏による基調講演の後、東京大学大学院教授の藤原帰一氏をコーディネーターに、京都大学東南アジア研究所所長・教授の清水展氏を交えて意見交換しました。



山地民は柔軟で流動性に満ちている！

ほとんどの東南アジアの地域では、山地民と平地民は基本的に異なる人だといわれています。平地民はいろいろな社会階層、税金、歴史、文明があり、何より水田稲作があります。人々を集め、力を集中して行う水田稲作は、生産性も高く穀物を小さな地域に集めるために非常に重要です。一方、山地民は、焼畑農業、分散型の耕作です。永久的な国家が存在せず、体系的な課税制度はありませんが、比較的平等主義が図られ、文化的・言語的な多様性があります。このような山地民と平地民の違いは永久的であると見られてきました。

しかし、歴史的に見ると、非常に多くの人々が同じ時期に、山地から平地へ、逆に平地から山地へと移っています。20世紀の前までは、平地の人々がよく山地に移り、山地民となっています。徴兵制、課税、疫病などから逃れるため、あるいは政治的、宗教的な違いのために国家から逃れたのです。

山地は分散に適した社会構造で、系統樹は分断化していきます。すなわち、大きな集団を小さな集団、そして核家族へと分断していきます。圧力を受けると、どんどん小さく区切られていくのです。山地民は国家からの圧力がなければ水田稲作をし、圧力が高まると焼畑農業になり、さらに大きな圧力がかかると焼畑農業から採集狩猟に移ります。つまり外圧によって農業形態が変わるのであって、生態的な選択ではないのです。多くの地域では、水田稲作、焼畑農業、採集狩猟の三つの選択肢があり、その中で彼らは選択をしてきました。国家との関係において、彼らにとって政治的に一番よいものが選ばれたわけです。また、山地民は歴史を持たないことを自ら選択した、あるいは自分たちが何者であり、どこから来たのかという自らが必要な歴史だけを持つという特徴もあります。

そのような選択は平地の国家に対する政治的・戦略的な適用であり、シンプルで原始的な条件によって形成されたわけではありません。

コメンテーター
清水 展氏（京都大学東南アジア研究所所長・教授、福岡アジア文化賞学術研究賞選考委員会副委員長）

一昨年、タイ北部山地のラフ族の村に調査に行きました。彼らは今も焼畑農業を中心とした伝統的な生活を守りながら、衛星放送のパラボラアンテナやオートバイなど、新しいものを取り入れています。彼らは孤立しているのではなく、常に外部との緊張関係の中で拒絶していたり、受け入れられるものは積極的に受け入れたり、ダイナミックな関係の中で生きているのです。

コーディネーター
藤原 帰一氏（東京大学大学院法学政治学研究科教授）

スコット先生は、権力に対し正面からの抵抗はしなくてもさまざまな手段で自らの生活を守ろうとする農民や、野蛮人として見られている山地民の姿を、自ら現地で生活を共にして彼らの信頼を得ながら、また日常の生活においても牧畜を行い農民の暮らしを実践する中で明らかにしてきました。

政治学は、政治に関係ない人に目を向ければ向けるほど難しくなります。肩書きのない一般の人々が何を考えているのかは、自分で努力しなければ分からないのだと、いつも謙虚に取り組んでおられます。知らないことに対する強い好奇心と、自分を守る権力を持たない人に対する関心、そして愛情が感じられます。

事務局より

市民フォーラム終了後、スコット先生のところに一人の女子高校生がやって来ました。

「大学に進学したら先生のような研究をしたいと思っていたので、お話が聞けて本当に良かったです」。３人の先生の目が一斉に輝き、しばらく続いた熱い語りが印象的でした。（浦）

VOICE

「講演を機会に先生の著書を読んでみたいと思いました」和歌エステルさん（福岡市南区）。「アジアの少数民族の村を旅したこともあり、講演に興味がありました。ダイナミックな思考に触れることができよかったです」久美子さん（同）

第21回
学術研究賞受賞者

毛里 和子
MORI Kazuko

日本／地域研究〔現代中国〕
現代中国研究者（早稲田大学名誉教授）

毛里和子氏は政治学者で、日本における現代中国研究の第一人者である。アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献するとともに、中国研究、アジア地域研究の組織化、国際学術交流の分野でも精力的に活躍するなど、その功績はまことに顕著である。

主な経歴

1940	東京都に生まれる
1965	東京都立大学人文科学研究科修士号（歴史学）
1965-87	日本国際問題研究所研究員および主任研究員
1994	第6回アジア・太平洋賞大賞
1999	第15回大平正芳記念賞
1999-2010	早稲田大学政治経済学術院教授
2005-06	日本現代中国学会理事長
2007-10	早稲田大学アジア研究機構・現代中国研究所所長

主な共同研究のリーダー歴

1996-98	文部省科学研究費補助金重点領域研究「現代中国の構造変動」領域代表
2007-09	大学共同利用機関人間文化研究機構・現代中国地域研究拠点プログラム・拠点幹事長

主な著作

『新版 現代中国政治』名古屋大学出版会 ,2004.
『グローバル中国への道程―外交150年（叢書 中国的問題群全12巻）』（共著）, 岩波書店 ,2009.

いまだ“近くて遠い国・中国”の真髄に迫る最中

この賞はこれまで、日本が世界に誇る知性、アジア地域研究の世界的人材、私が尊敬してやまない諸先輩が受賞されており、今回、敬愛なるジェームズ・C・スコット教授とご一緒する栄誉に浴することができ、その学問的重みに圧倒されます。

現代中国・アジア研究にかかわって40年以上ですが、対象の中国はまことに強敵・難敵で、いまだ核心を捉えたという域には至っていません。中国を社会科学の対象としてできるだけ客観化しようと「中国政治社会は二元構造ではなく三元構造だ」「現代アジアとの比較研究が地平を切り拓く」「制度主義による接近が有効だ」という「三つの挑戦」の最中です。今回の受賞は、これまでの研究に対する“ご褒美”というよりも、研究がまだ足りないから一層頑張りなさい、日本の中国・アジア研究をどんどん国際的に発信しなさい、という激励をいただいたと考えています。

（授賞式スピーチより）

学校訪問

実施日／9月17日　会　場／福岡県立修猷館高校

「臨地研究のすすめ― Invitation to Area Studies ―」をテーマに、毛里氏が講演しました。講堂に集まった1、2年生を前に、自身と九州のつながりを交えて自己紹介。続いて、戦後日本最初の海外学術調査の記録映画「カラコルム」が地域研究に興味を持つきっかけとなったこと、自身が中国でどんな研究をしてきたか、地域研究についての面白い本の紹介など、写真や図を用いながら話しました。さらに文化と文明の関連性について話を広げながら「興味ある地域の文化を知りたければ実際に現地に足を運ぶべきだ」と訴え、地域研究の素晴らしさを伝えました。

講演後は生徒代表約20人との懇談会を開催。「アジア各国との良好な関係を築くためには、あなたたちの力が必要」とメッセージを送ると、生徒たちも力強くうなずいていました。

生徒840人が講堂に集合し、毛里氏の話に耳を傾けました

記録映画を見て山が好きになった毛里氏。興味を持つことの大切さを伝えました

講演後、生徒代表から感謝の花束贈呈

市民フォーラム

開催日／9月18日
会　場／イムズホール　参加者／320人

「中国式発展モデルの向かう先 ～中国は、世界モデルになりうるか～」

中国の発展モデルは世界基準となり得るか、など未来への考察を中心に講演。後半は、早稲田大学大学院教授の天児慧氏、九州大学大学院准教授の堀井伸浩氏を交えたパネルディスカッションを開催しました。

講　演

現代中国を研究する上で注意すべき点は無数のパラドックスが存在し、私たちの常識があてはまらないこと。このため懐疑的になる必要があります。こうしたなかで、私は現代中国研究に対して次のような三つの挑戦をしてまいりました。

挑戦その１は、近代世界は中央政府・地方政府など二元構造ですが、中国はこれに加えて末端の自治的単位が存在するなど、中国社会を三元的に捉えて考える「三元構造論」。挑戦その２は、他のアジア諸国との共通点に着目し、同じ民主化の道をたどるとみる「中国のアジア化」。挑戦その３は、変わる政策、変わらない制度に注目する「制度化の視点」。私たちは一朝一夕に変わる政策を見て、中国は改革開放で生まれ変わったと一見幻惑されますが、中国共産党の財政的なよりどころである土地の公有制など根本的な制度は非常に注意深く温存されています。

中国を分析し将来を考える道筋として、中国の発展モデルは四つ考えられます。民主化と市場化を目標とする「普通の近代化モデル」、明治維新以来、日本が歩んできた道や台湾などアジア型民主政治への道をたどる「東アジアモデル」、儒教など伝統的価値を重んじる「伝統への回帰モデル」、中国独自のモデルをつくり上げる「中国は中国モデル」です。私は「東アジアモデル」で中国の現在・未来を考えることが多いです。

中国は改革開放から30年間で経済成長を実現しました。成長の牽引者は政府・党自身で、民間が強いというよりいわゆる官製資本主義、国有企業や国富が潤い、エリートと大衆の間に格差が生まれています。こうした発展の道に対しては諸説ありますが、近未来についての暫定的観察ということでは中国式発展モデルは普遍モデルにならず、またアメリカと並ぶ帝国になるのは、世界に公共財、文化力（支配的価値）、周縁に自立的に国民経済を許さないグローバルな経済力を提供できるか、という帝国の条件を満たさないことから無理だろうというのが私の結論です。しかし、中国は国の大きさとスピードでグローバリゼーションを主導する存在になると思っております。従って日本も慎重な対応と注目、分析が必要になります。

パネルディスカッション

コーディネーターに天児慧氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）、パネリストに堀井伸浩氏（九州大学大学院経済学研究院准教授）を迎えてのディスカッション。堀井氏は、中国経済研究の立場から毛里氏の「官製資本主義」、「中国の変わる政策・変わらない制度」に触れながら民営企業の果たしてきた役割や市場化に言及し「制度は実は変革しているのでは」と提起、さらに民主化について「経済のダイナミズムから見ても条件が整いつつあるのでは」とし、毛里氏は「民主化の条件についてはリベラルな中間層の存在や支配エリート間の分化など政治学的に考え、注意深く観察する必要がある」と加えました。

また、中国に対する関心の高さから、会場より宗教、民族、環境問題をはじめ多くの質問が寄せられ、3氏は限られた時間の中で分析を交えて説明。最後に日本との関係、尖閣諸島問題の質問に、毛里氏からは、「外交のうまい中国の情緒的対応」や「国内世論への脆弱性」、「両国が扱いにくい相手と感じている関係から成熟した関係へ」等の観点による見解が、天児氏からは中央政府のコントロールに関する懸念とともに「日本は尖閣諸島を近代国際社会の論理に沿って領土とし、中国は近代国家による前の理屈、事例をもって主張」とすれちがいを説明、双方の議論による解決をと締めくくられました。

天児慧氏

堀井伸浩氏

アジア文化サロン

実施日／9月17日　会　場／九州大学大学院

北九州市立大学の田村慶子教授など東南アジア研究者や学生約30人が参加。「現代アジア政治学のススメ」と題して意見交換しました。

まず毛里氏は「現代中国 三つの挑戦」「現代アジア学の創生」など21世紀COEプログラムの5年間で研究した成果を紹介。「現段階までアジアが歴史・伝統を共有しており、目標・方向に共通性が見られる。これが『現代アジア学』が成り立つゆえん」と語りました。その後、中国の民主化など将来の展望に関する参加者からの質問に「グローバルな経済の動向が中国の政治的将来に影響を及ぼすと思う。1960年代から現在に至るまでアジアの国々が経験した様々な変化を理論化し、中国がどこにあてはまるかを考えるべきです」とまとめました。

VOICE

「中国の発展の話は具体的な事例を挙げて説明していただいたので、分かりやすかった」山崎裕菜さん（福岡県春日市）。「難しい部分もありましたが、未来へ向けた話はとても興味深かったです」吉松未希さん（同県大野城市）

第21回
芸術・文化賞受賞者

オン・ケンセン
ONG Keng Sen

シンガポール／演劇
舞台芸術家（劇団シアターワークス芸術監督）

世界的に活躍する舞台芸術の旗手。現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出会わせるその演出作品は、幅広い観客層から支持されている。伝統を軽んじることなく俳優の身体性を生かしつつも、ポップな感性を忘れないオン・ケンセン氏の演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓いている。

主な経歴

1963	シンガポールに生まれる
1989	シンガポール国立大学法学部卒業 シアターワークス（シンガポール）アーティストディレクター就任
1992	シンガポールヤング・アーティスト賞（演劇部門）
1995	ニューヨーク大学大学院パフォーマンス研究専攻修士号
1996-	シアターワークス「フライング・サーカス・プロジェクト」展開
1999-	アーツネットワークアジア（ANA）設立
2002-03	「コンティニュアムアジアプロジェクト」展開
2003	国際パフォーミングアーツ（IPSA）より優秀芸術家賞 シンガポール文化勲章（演劇部門）
2009	ニューヨーク・アジア協会国際評議員就任

主な演出作品

『リア』東京、大阪、福岡、香港、シンガポール、ジャカルタ、パース、ベルリン、コペンハーゲン ,1997-99.
『デステモーナ』アデレードフェスティバル、シンガポール・アーツ・フェスティバル ,2000、福岡アジア美術館 ,2001.

“アジアの記憶”を見つめて

私が所属する劇団「シアターワークス」は、1995年以来、アジアの芸術家とともに、多様なアジアの芸術や言語が共存する舞台を創り上げてきました。また、からゆきさんをはじめ様々なアジアの記憶を発掘し、アジアにおける移住の隠された歴史を明らかにするなど、伝統と近代の不確かな関係性を作品に映し出してきました。私たちは、戦争などの難しい問題や様々な考え方から、目を背けてはきませんでした。いつの時代も、芸術は社会や政治を映し出す鏡だと思っています。生物学的持続可能性が議論にあがっている今、芸術と文化が、どのように社会や人類を支え、この冷笑的な時代の理想主義や希望を支え続けてきたかを、思い出すことが必要だと思います。

福岡アジア文化賞は、芸術と文化の意義を立ち止まって考えさせてくれる理想的な賞であり、都市の垣根を越えて、その影響は福岡から世界に広がっていくでしょう。私はこの賞を受賞したことに感謝し、それを可能にしてくれた皆さまにお礼を申し上げます。

（授賞式スピーチより）

学校訪問

実施日／9月17日　会　場／福岡市立北崎小・中学校

糸島半島の豊かな自然に囲まれた北崎小・中学校を訪れたオン氏。漢字で自己紹介するなど、和やかなムードで交流会が始まりました。続いて、生徒を次々に前に呼んで、九州、日本、アジア諸国の地図をホワイトボードに描かせ、こう語りかけました。「自分が暮らすエリアは世界と比べればとても小さい。でも、大きさを面積だけで捉えては面白くない。生まれ育ったその土地は、自分にとっては全世界と等しいくらい大きな存在だ。両親の望みや思いが込められた自分の名前や、自分を形作った故郷について考えながら、自由な表現をどんどん発信してほしい」

後半には、オン氏がプロデュースし、ラオスの7～14歳の子どもたちが制作したビデオアートを上映。同世代の子どもが構成、撮影した映像に、生徒たちは熱心に見入っていました。

生徒たちに語りかけるオン氏（左から２人目）

北崎で栽培されたバラの花束が贈られました

生徒たちが熱心に見入ったビデオアート

市民フォーラム

開催日／9月18日
会　場／イムズホール　参加者／230人

「身体の越境～オン・ケンセンの挑戦～」

福岡アジア文化賞芸術・文化賞選考委員である内野儀氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）を進行役に迎えたフォーラムでは、これまでにオン・ケンセン氏が手掛けた作品の一部を上映。本人の解説を交えながら、多彩で斬新な世界観に触れました。

多様な選択肢を提供したい

まず初めに内野儀氏から、オン・ケンセン氏の大きな特徴として次の3点が挙げられました。

1. インターカルチュラリズム。1970年代後半から、様々な文化の間に立ち活動されている。
2. 劇団シアターワークス「フライングサーカス・プロジェクト」といった、アーティストの相互交流、プロセス重視の作品づくり。
3. 助成ネットワーク、アーツネットワークアジアを立ち上げ、アジアの芸術家の創造を助けている。「オン氏は、アジア・世界へとエネルギッシュに幅広い活動をされています。今までの功績のみならず、まだ若いオン氏には、これからの10年、20年、30年と今後が大きく期待される方です」と紹介し、オン氏の作品の上映と移っていきました。

最初に上映されたのは、シェークスピア作の「リア王」を題材に、日本人脚本家の岸田理生が台本を手掛けた作品「リア」。六つの異なる国の出身者である役者一人一人が母国の言語でせりふを話し、現実世界そのままの複雑性を舞台化。演出スタイルが話題を呼び、オン氏の存在を世界に印象づけた代表作品です。

次はカンボジアの人々が、ポルポト政権時代の虐殺を乗り越え、今へと続いてきたかを描き出した「コンティニュアム－虐殺の場所の彼方へ－」。ステージの上を“死者と対話する場所”とし、スクリーンに映し出されるＶＴＲと生の演技をミックスさせた印象的な舞台を作り上げました。

３番目は、ステレオタイプな日本のイメージを意識した作品「ゲイシャ」。日本舞踊や歌舞伎をイメージさせる動きや三味線の音色に、現代的な電子音をミックスさせており、時代や文化、性別をクロスさせ、当たり前という思いこみをくつがえさせる表現方法に参加者全員が引きつけられました。

第４に、第２次世界大戦後、ＢＣ級戦犯として処刑された山本正一氏の息子のインタビューを通じて、戦争の記憶とは何なのか、誰の戦争の記憶なのかを問いかける「サンダカン葬送歌」。写真と映像と生の演技を織り交ぜた柔軟な表現方法で、公式発表されている歴史とは違った、見る者に様々な解釈の選択肢を提供しました。

スタンダードな再構築をテーマに古典的表現を求めた1990年代、ドキュメンタリーとしての演劇を広く手掛けた2000年代。オン氏は「私の表現はキルティングのような作業。一つ一つ集めたパーツを紡いでアウトプットし、色々な可能性を表し、見ている方にイマジネーションを膨らませてほしい」と話します。2010年代は、さらに遊び心に満ちたミステリアスな世界観の表現に期待が高まります。客席からも「日本で生の舞台を見たい」との声が多数上がっていました。

内野儀氏

アジア文化サロン

実施日／9月18日　会　場／福岡アジア美術館

10年前、オン氏演出の「デステモーナ」が上演された福岡アジア美術館で、文化サロンを開催。多数の演劇関係者や市民が参加しました。ここでは、「Dreamtime in Morishita studios」という「戦争」や「慰安婦」の問題をテーマにした演劇作品をスクリーンで上映。オン氏は「目指したのは、“脱・台本”です。チェーンソーを用いた躍動的なアクション、舞台上をゆっくりと歩き回りながら服を脱ぎ着するなどの既成概念を壊す新たな手法で表現した。残酷な戦争の歴史を、新たな感覚で捉えてほしかった」と解説を添えました。「氏の作品を見て、何が始まるのか、なぜ男性が女性を演じているのかと思いを巡らせていると、自分の中で気づかぬうちに固まっているイメージがあることに気づかされる」と参加者は感想を述べていました。

VOICE

「作り手の意図を伝えるだけでなく、受け取る側に選択肢を与える演劇、という考え方に強いパワーを感じました。日本で観劇できる機会を楽しみにしています」
宮原一枝さん（福岡市西区）、糸山裕子さん（福岡県那珂川町）

各受賞者への贈賞理由

大　賞

黄秉冀（ファン・ビョンギ）
HWANG Byung-ki

韓国／音楽

贈賞理由

黄秉冀氏は、韓国の伝統楽器である伽倻琴（カヤグム）の演奏家であり作曲家である。氏の柔軟で卓越した音楽的想像力によって、伽倻琴の演奏を通して創作された作品の数々は、伽倻琴の伝統を受け継ぎつつも現代性と国際性を兼ね備えた独創的な世界を持つ。

黄氏は、1936年ソウルに生まれる。1950年の朝鮮戦争時に疎開した釜山において、初めて伽倻琴に出会い、その美しい音色に魅了される。1951年から1959年まで国立国楽院で伽倻琴を学ぶとともに、1959年ソウル大学校に国楽科が創設されるのを機に講師として教壇に立った。その後、1974年から2001年まで梨花女子大学校韓国音楽科の教授を務めながら、ヨーロッパや米国など各地で公演を行い、世界を活動の場としている。現在、梨花女子大学校の名誉教授であるとともに、2006年から国立国楽管弦楽団の芸術監督を務めている。

大学で人材育成にあたるなど韓国音楽界に多大な貢献を果たす一方で、自身が優れた演奏家、作曲家として1957年のKBS全国国楽コンクール最優秀賞をはじめとして、1965年の国楽賞、1992年の中央文化大賞、2003年方一榮（パンイルヨン）国楽賞、2006年の大韓民国芸術院賞など名誉ある賞を数々受賞し内外の評価を得るとともに、伝統音楽の創作に先覚者として力を尽くした。

黄氏は、自身を伝統的な演奏家であり現代的な作曲家と表現する。伝統に対する深い理解者でありながら、伝統や自己の感性をも超える独創を見出そうとする。韓国の伝統音楽が形作られた朝鮮王朝の宮廷音楽の時代的枠組みをさかのぼり、西域とも交流のあった新羅時代をイメージすることで生まれたのが、氏の音楽の転換点とも言われる1974年の『沈香舞』である。この作品は、美しさと幽玄の妙を見事に表現したものである。既存の固定観念を打破した点で前衛的とも言える1975年の話題作『迷宮』もまた、新たな境地を切り拓いた代表作であり、伝統音楽から現代性、世界性に対して受容と挑戦を続けている。

伽倻琴の伝統を正しく受け継ぎ深い理解に裏打ちされた卓越した演奏と、伝統と現代の超克の中で韓国からアジア、世界へと広がりを見せる作曲との融合により創り出された作品の数々は、演奏家のみならず作曲家として偉大な業績であり、まさに「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい。

学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT

米国／政治学・人類学

贈賞理由

ジェームズ・C・スコット氏は、東南アジア農村社会において、小農や小作農が生存の保障を求めて国家や地主の過重な介入や収奪に抵抗する心情と論理、それに起因する社会動態のメカニズムを、詳細な文献研究と２年におよぶマレーシア農村でのフィールド・ワークによって明らかにした。その知見は、アジアという地域を超え政治学の領域を超えて、「モラル・エコノミー論争」と呼ばれるような、学際的議論を呼びおこした。

その後の研究展開で、権力に対する面従腹背の姿勢は、奴隷制や農奴制やカースト制をはじめ、支配と抑圧の中にある従属階級の人々に広く見られる抵抗の基本形態であり、権力関係の及ばない舞台裏での言動の批判力と変革への可能性を明らかにした。さらには貧者の生活を改善しようとする社会工学的な国家プロジェクトが繰り返した失敗を回避するためには、地域に根差した実践的な知識と慣行を理解し尊重すべきことを、理論的考察と事例研究を通して説得的に示した。

東南アジアから始まり、近現代世界における権力の支配と人々の反発が織りなすダイナミックな関係を分析してきたスコット氏の知的遍歴は、最新刊『統治から逃れるための技術－東南アジア山地のアナーキズム史観』(2009) で再び東南アジアへと回帰した。国家の徴税や労役徴発を嫌って山地に逃れた人々が、自由と自律を守るために柔軟で流動性に満ちた社会と文化を作り守ってきたという大胆な主張は、侃々諤々の議論を引き起こしつつある。

スコット氏は、1967年にエール大学で博士号を取得し、ウィスコンシン大学教授を経て1976年よりエール大学の政治学教授、そして1991年より農村社会研究所所長として、多くの後進を指導育成してきた。また、近代国家における支配と被支配の関係を、生存の維持、支配と抵抗、日常の政治、アナーキズムなどの概念を核として精緻に分析した。支配されてきた弱者の価値観と意味世界に焦点を当てた深い洞察に基づく研究は、政治学のみならず、文化人類学、農村社会学、歴史学等を包摂する豊かな学際性を有する。

このようにジェームズ・C・スコット氏の研究は、東南アジア地域研究と政治学を出発点として越境し隣接諸学を刺激し、挑発し、生産的な議論を誘発してきた。この貢献は、まさに「福岡アジア文化賞－学術研究賞」にふさわしい。

学術研究賞

毛里 和子
MORI Kazuko

日本／地域研究〔現代中国〕

贈賞理由

毛里和子氏は政治学者で、日本における現代中国研究の第一人者である。氏の学問的業績は中国政治、中国国際関係史、中国の民族問題の３分野にわたり、それらを有機的に統合することによって現代中国の全体像を描き、アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築にも大きな貢献をなした。

毛里氏は1940年東京都に生まれ、1962年お茶の水女子大学文教育学部史学科（東洋史専攻）を卒業した。その後、先駆的な女性研究者として、次々と質の高い研究論文を発表した。日本国際問題研究所主任研究員、在上海日本国総領事館初代専門調査員、静岡県立大学、横浜市立大学を経て、1999年4月から2010年3月まで早稲田大学政治経済学部・大学院政治学研究科教授として、地域研究、中国政治と外交、東アジアの国際関係にかかわる研究と教育を担当してきた。

毛里氏の代表作『現代中国政治』は、社会主義、発展途上国、伝統の三つの視座から党・国家・軍の機能と関係を比較政治学の手法で分析しており、その内容は日本の中国研究の最高水準を示すものと評価された。また『周縁からの中国－民族問題と国家』は、1940年代から現在にいたる中国の国家統合・国民形成のプロセスでウイグル人など辺境の民の歴史を政治学と国際関係論の立場から分析した体系的研究で、国際政治の中での中国のもうひとつの姿を立体的に浮かび上がらせることに成功したと評価された。さらに『日中関係－戦後から新時代へ』は、相互依存と相互不信が複雑に絡まる現代の日中関係を過去にさかのぼって実証的に整理し直し、今後のあるべき関係を説得的に提示した。

毛里氏は研究者としての傑出した業績だけでなく、中国研究とアジア地域研究の組織化、国際学術交流の分野でも大きな功績を残した。特に文部省科研費重点領域研究「現代中国の構造変動」（1996-98年度）では、代表者として70人を超える中国研究者の共同研究を推進し、その成果を『現代中国の構造変動』全８巻として刊行した。また文部科学省21世紀COE「現代アジア学の構築」プロジェクト（2002-06年度）の拠点リーダーとして、日本のアジア地域研究のレベルアップのために精力的に活躍してきた。このように、学術界の発展に大いに寄与し、その功績はまことに顕著であり、まさに「福岡アジア文化賞－学術研究賞」にふさわしい。

芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen

シンガポール／演劇

贈賞理由

オン・ケンセン氏は、世界を舞台にいま最も旺盛な創作活動を続ける舞台芸術家である。現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出会わせるその演出作品は、世界的に高く評価されている。伝統を軽んじることなく俳優の身体性を生かしつつも、ポップな感性を忘れない氏の演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓いている。

オン氏は1963年シンガポールに生まれ、1989年シンガポール国立大学法学部卒業。大学在学中の1988年、「シアターワークス」を設立して演出家としての活動を開始。1993年から1994年、アメリカ合衆国ニューヨーク大学大学院に留学して修士号（パフォーマンス研究）を取得。留学と前後して演出作品が日本や欧米でも上演され、その名が世界的に知られるようになった。以降、アジアと欧米の主要な劇場や演劇祭から委嘱されて多彩な作品を発表、2003年にはシンガポールの文化勲章（演劇部門）を授与されている。

オン氏は常に、「今、アジアで芸術家として生きるとはどういうことか」という根源的問いに向き合いつつ、その活動を展開している。氏の演出家としての眼差しは、アジア諸地域と欧米への地理的な広がりと歴史的記憶への時間的な広がりを同じように胚胎する。1996年から継続的に展開している『フライング・サーカス・プロジェクト』では、アジアと欧米から古典芸能と現代芸術の、また舞台芸術にとどまらない多様なジャンルのアーティストを招いて画期的な共同作業の場を設定した。そこから生まれたのが、『リア』（1997-99）や福岡アジア美術館でも上演された『デスデモーナ』（2000-01）といったシェイクスピア劇の斬新な翻案舞台である。また、『サンダカン葬送歌』（2004）や『コンティニュアム－虐殺の場所の彼方へ』（2001-10）のようなドキュメント演劇というジャンルに属するパフォーマンスでは、アジア地域の戦争の記憶をフィールドワークでたどりながら、その鋭い批評意識によって、アジアの歴史を観客とともに見据えるようなスリリングな舞台作品に結実させた。

ジャンルと国境を横断しつつ、古典と現代、東洋と西洋という二元論を打破するパフォーマンス作品によって世界の演劇界をリードするオン・ケンセン氏の活動は、その今日的な問題意識で、根源的かつ普遍的な芸術の持つ力を再認識させた。この貢献は、まさに「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい。

授賞式

日時／９月16日（木） 18：20〜20：00
会　場／福岡国際会議場

秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、市民や各国、各界関係者など約千人が参加して授賞式が開かれました。厳粛な雰囲気に包まれた第１部では、あでやかな和服姿の筑紫女学園大学アジア文化学科の学生にエスコートされながら受賞者が登壇。吉田宏福岡市長と鎌田迪貞よかトピア記念国際財団理事長から賞状とメダルが贈られました。受賞者は受賞の喜びや福岡市民へのメッセージを込めてそれぞれスピーチ。最後は福岡インターナショナルスクールの子どもたちから花束が贈呈され、盛大な拍手に包まれました。

第２部では司会の女優・檀ふみさんと受賞者が和やかに対談。幼いころに興味を持っていたことや、今大切にしている時間など素顔に迫る質問に、各受賞者の意外な一面や共通点が浮かび上がりました。対談後は、市民代表の河原抄子さんが祝福の言葉を贈り、エンディングではカヤグムの演奏（大賞の黄秉冀氏作曲「夜の声」）で受賞者を祝福しました。

式　次　第

【第１部】
受賞者紹介
主催者代表挨拶
福岡市長　吉田　宏
お言葉
秋篠宮殿下
選考経過報告
福岡アジア文化賞審査委員会委員長　有川　節夫
贈　賞
福岡市長　吉田　宏
㈶よかトピア記念国際財団理事長　鎌田　迪貞
受賞者挨拶
【第２部】
受賞者と檀ふみ氏との対談
市民代表お祝いの言葉
特別演奏　カヤグム「夜の声」

賞状を贈るよかトピア記念国際財団の鎌田理事長（左）

檀ふみさん（中央）の司会で和やかに進行

受賞者と司会の檀ふみさんの対談

韓国の伝統楽器カヤグムの演奏「夜の声」

第21回福岡アジア文化賞授賞式　秋篠宮殿下お言葉

本日、福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される４名の方々に心からお祝いを申し上げます。

近年、国際社会におけるグローバル化が急速に進展する中、多くの国や地域では、共通のあるいは一般化された思考方法や利便性を受容しながらも、一方で固有の文化や伝統などを継承しつつ、新しい文化の創造にも多大な努力を重ねております。アジアには多様な風土や自然環境が創り出し、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗など文化の深さや豊かさがあります。私自身、アジアを旅するおりに、その深さや豊かさに感銘を受けるとともに、それらを保存し継承していくことの大切さを強く感じます。

このような時代にあって、福岡アジア文化賞は、アジアの固有で多様な文化の保存と、継承そして創造に貢献するものであり、大変意義深いものと考えます。本日受賞される方々の優れた業績は、アジアの文化に対する貢献だけでなく、世界に対してアジアが有する文化を広く示すとともに、社会全体で共有する人類の貴重な財産になるのではないかと思います。

終わりに、受賞される皆様に改めて敬意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がより一層促進されることを祈念し、私のあいさつといたします。

祝賀会

授賞式後に関係者が集まって開かれた祝賀会はくつろいだ雰囲気の中で進みました。シンガポール共和国大使館のローレンス・ベイ臨時代理大使が祝辞を述べ、各国の代表者や福岡の参列者とともに受賞者の功績をたたえました。

広報活動ほか

国内・海外記者会見および報道実績

6月7日に福岡で記者会見し、受賞者名と選考経過、贈賞理由などを発表しました。その後6月から7月にかけて各受賞者の記者会見が現地で開催され、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績などが世界に報じられました。
報道件数：国内122件、海外46件
（2010年12月1日現在）

福岡記者会見（受賞者発表）、6月7日（月）福岡にて受賞者を発表しました。

HWANG Byung-ki

黄秉冀氏の記者会見

受賞者／黄秉冀（ファン・ビョンギ）
開催地／ソウル
開催日／7月22日（木）
参加者数／45人

主な来賓・出席者など
- クォン・スンヒョン氏（芸術院会長）
- パク・ヨング氏（元老音楽評論家）
- 鈴木浩氏（在大韓民国日本国大使館公報文化院院長）
- 林権澤氏（第8回芸術・文化賞受賞者）
- 藤井知昭氏（国際文化研究所所長）

James.C.SCOTT

ジェームズ・C・スコット氏の記者会見

受賞者／ジェームズ・C・スコット
開催地／米国コネチカット州
開催日／6月29日（火）
参加者数／25人

主な来賓・出席者など
- ピーター・サロベイ氏（エール大学副学長）
- 辻優氏（在ボストン日本国総領事館総領事）

MORI Kazuko

毛里和子氏の記者会見

受賞者／毛里和子
開催地／東京
開催日／7月13日（火）
参加者数／30人

主な来賓・出席者など
- 白井克彦氏（早稲田大学総長）
- 石澤良昭氏（上智大学学長）
- 天児慧氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
- 竹中千春氏（立教大学法学部教授）

ONG Keng Sen

オン・ケンセン氏の記者会見

受賞者／オン・ケンセン
開催地／シンガポール
開催日／7月30日（金）
参加者数／75人

主な来賓・出席者など
- チャン・ヤン・キット氏（情報通信芸術省事務次官）
- 山中誠氏（在シンガポール日本国大使館大使）
- アンソニー・リード氏（第13回学術研究賞受賞者）
- レイナルド・C・イレート氏（第14回学術研究賞受賞者）

その他広報活動

ホームページ、メールマガジン、新聞広告など各種媒体を活用し広報しました。また、各関係機関・団体、大学、飲食店などにチラシ配布を協力いただき、参加者募集を行いました。

福岡アジア文化賞ホームページおよびメールマガジン「アジアの風だより」
http://www.asianmonth.com/prize

福岡アジア文化賞ホームページでは、85人の歴代受賞者について、その人物像を紹介しています。アジアが誇る文化の巨人たちの市民フォーラムなどの記録を第1回から公開し、珠玉の言葉を今に伝えるアーカイブ。より深く知りたい人のための書籍通販コーナーや最新のイベント情報、受賞者の横顔、歴代受賞者の近況などをお届けするメールマガジン「アジアの風だより」の発信とともに、福岡アジア文化賞の魅力を余すところなく紹介しています。

福岡アジア文化賞委員会委員名簿

※2010年9月現在

特別顧問	近藤　誠一	文化庁長官
〃	村田　直樹	外務省広報文化交流部長
〃	麻生　渡	福岡県知事
名誉会長	吉田　宏	福岡市長
会　長	鎌田　迪貞	(財)よかトピア記念国際財団理事長
副会長	有川　節夫	九州大学総長
〃	河部　浩幸	福岡商工会議所会頭
〃	光安　力	福岡市議会議長
〃	髙田　洋征	福岡市副市長
監　事	本田　正寛	福岡市社会福祉協議会会長
〃	進藤　千尋	福岡市会計管理者
委　員	青木　秀	福岡文化連盟名誉顧問
〃	阿部　真之助	福岡市議会第1委員会委員長
〃	衛藤　卓也	福岡大学学長
〃	海老井　悦子	福岡県副知事
〃	遠藤　正雄	日本放送協会福岡放送局長
〃	太田　宏	読売新聞西部本社代表取締役社長
委　員	小川　弘毅	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	貝田　由紀	福岡市教育委員会委員長
〃	喜多　悦子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	木村　伊量	朝日新聞社西部本社代表
〃	久保　浩	福岡市議会副議長
〃	斎藤　修一	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
〃	佐護　譽	九州産業大学学長
〃	佐藤　靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	新藤　恒男	株式会社西日本シティ銀行特別顧問
〃	滝本　徹	九州経済産業局長
〃	多田　昭重	西日本新聞社代表取締役相談役
〃	田中　浩二	九州旅客鉄道株式会社相談役
〃	田中　青史	毎日新聞社常務取締役西部本社代表福岡本部長
〃	玉木　良知	九州運輸局長
〃	佃　亮二	株式会社福岡銀行相談役
〃	長尾　亜夫	西日本鉄道株式会社取締役会長
〃	橋田　紘一	株式会社九電工代表取締役社長
〃	G・W・バークレー	西南学院大学学長

福岡アジア文化賞
歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor

第1回 1990

創設特別賞

巴　金
BA Jin
（中国／作家）●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤　明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●
「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（イギリス／中国科学史研究者）●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●
大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野　暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

●は故人

第2回 1991

大　賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）
豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）
東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞

中根　千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）
アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
（アメリカ／日本文学・文化研究者）
大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大　賞

金　元　龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●
東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（アメリカ／文化人類学者）●
インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内　實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）
社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●
東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大　賞

費　孝　通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●
中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）
マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田　二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●
ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●
モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大　賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●
タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王　賡　武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）
華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井　米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●
タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）
インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●
インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓　基　彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）
独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島　昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）
刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（アメリカ／ビデオ・アーティスト）●
テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞

王　仲　殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）
古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）
イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衞藤　瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●
中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●
イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞

チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）
内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）
独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

樋口　隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）
フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

林　権　澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）
韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞

李　基　文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）
韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（アメリカ／人類学者）
タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

上田　正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）
日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）
芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績をあげたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞

侯　孝　賢
HOU Hsiao Hsien
（台湾／映画監督）
厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞

大林　太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●
日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）
斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）
独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞

プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●
『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞

タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●
厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）
世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●
マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞

ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）
「グラミン銀行」を創始しマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞

速水　佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）
市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）
タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞

マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）
民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞

張　芸　謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）
現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞

キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）
スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞

アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）
『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞

ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）
マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞

外間　守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）
「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞

レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）
東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞

徐　冰
XU Bing
（中国／アーティスト）
独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通して東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞

ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）
シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞

アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）
インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞

厲　以　寧
LI Yining
（中国／経済学者）
中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞

ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）
ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞

ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）
イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞

任　東　権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）
韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞

トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）
貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞

ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）
ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞

タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）
ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞

莫　言
MO Yan
（中国／作家）
現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。

学術研究賞

シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）
世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞

濱下　武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）
アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞

アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）
「ロック・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞

アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）
臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞

シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）
関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞

朱　銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）
深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞

金　德　洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）
「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞

アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）
幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）
南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）
民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）
バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞

オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）
欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞

パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）
正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきたインドの政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞

蔡　國　強
CAI Guo-Qiang
（中国／現代美術家）
北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

芸術・文化賞

三木　稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）
邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。